
浴室

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浴室

【Nコード】

N2353K

【作者名】

須江

【あらすじ】

浴室で交わされたエグい会話

嘔吐して火照った頬に、冷たいタイルは気持ちよい。朝の食パンを完全に追い出し、やっと落ち着いてくれた胃にひきずられるようにして、キリンはその場へ横たわった。世界が回転をやめるまで、まだしばらく時間がかかりそうだった。

「何してる」

二つ年上らしく、タイは詰問の色を交えキリンを見下ろした。

「こんなところで寝るなんて、だらしないな」

キリンは黙って顔を上げた。

「困ったなら、僕を」

「困ってない」

ぶっきらぼうなキリンに、眉をしかめる。

「じゃあ、何か不満？」

「別に」

目を閉じ呟く。

「気持ちいいだけ」

しばらく眉間に皺を寄せていたタイは、やがてキリンの横に自らの身を横たえた。良い仕立てのスーツに皺ができることなどお構い無しで。

「気持ちいい？」

タイは、キリンを怯えさせる口だけの笑みを浮かべた。それは天使のように美しかった。

「確かにそうだけど、バカみたいだね」

タイは罰としてキリンを白いタイルと便器とバスタブしかないここに閉じ込めた。キリンが悲しんだから、というのが罪状だった。悲しまなくとも、生きていける。思い知らせるために。「眠い」

「寝ろよ」

僕が見てやるから、安心して。できるわけなかった。

「お前は俺自身なのに」

タイは肩をちよつとすくめ、白い歯を見せた。

「自分を信じないの？」 「信じない」

明日になったらタイはキリンを離すか殺すか、どちらかを選ぶ。

「乗っ取る？」

「かもね」

お互い他人事のような口調。ぴったりくる。俺らしい、とキリンは自嘲した。

この期に及んで、それを否定することは難しいと言った。それは否定した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2353k/>

浴室

2011年1月19日00時34分発行